

ゾイドワイルドetc.0.5

D, J

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゾイツク・アンドロイド。

縮めて「ゾイド」。

それは、金属の肉体と動物の本能・闘争心を持ち、新地球歴の時代において、地球の生態系の頂点に君臨する、最強生命体である。

地球の覇権を賭けて「帝国」と「共和国」が互いに凌ぎを削る時代。

その、何時の何処の事かは定かではないが、ユタラプトル種の相棒ゾイド「ギルリッター」と共に放浪の度続けるゾイドライダー「ガレット」は、賞金稼ぎで日銭を稼ぎつつ、放浪の旅を続けていた……。

目次

0.	「プロローグ」	1
1.	「流浪の騎士竜」	3
3.	「旅立ち」	15

0. 「プロローグ」

※※注意※※

私はゾイドワイルドシリーズは好きですが、全てを知り尽くしている訳ではありません。

ので、一部設定に矛盾、独自解釈が含まれますが、そこは本編とはパラレルワールドと切り離して見てください。

新地球歴。

かつて惑星Ziに旅立った移民船団が、星の寿命と共に惑星を脱出し、自らの母星たる地球へと帰還した事で、この時代は始まった。

再び地球に降り立った人類は、かつて惑星Ziに存在したという「ある生物」が、自分達よりも先に地球に到達していた事を知る。

本来それは、惑星Ziに生息していたハズの、金属生命体。時空の歪みにより、人類より一足先に地球に来訪した存在。

Zoic androids. (ゾイック・アンドロイド) 縮めて、「ZOIDS (ゾイド)」。

ロボットのような金属の肉体とオイルの血液、恐竜等の絶滅生物を含んだ動物の本能・特徴を併せ持つ、生命を持ったロボットとも言うべき最強の生命体。

自ら戦う意思を持った彼等は、この新地球歴の地球において、生態系の頂点に君臨していた。

いつからそうなったかは、当時の資料のほとんどが失われた事で明らかになっていない。

が、ゾイドと人間はまるで最初からそうであったように、近い位置にいた。

かつて惑星Ziでもそうであったように、人類と共にあったのだ。

ある時は、牛や馬のような労働力として。

ある時は、最高のパートナーとして。

ある時は……現行の全ての兵器を上回る、戦闘機械獣として。
現在の地球を二分している勢力である「帝国」と「共和国」。

かつて惑星Ziにおいても敵対関係にあった彼等は、地球に逃げ延びた後も、戦いをやめる事はなかった。

彼等は、自らの覇権と正義の為に、ゾイドを戦闘兵器として改造・運用している。

最強の生物であるゾイドは、同時に最強の兵器でもあったのだ。

やがて戦争は激化の一途を辿り、野生個体の捕獲では飽きたらず、化石化して眠っているゾイドの復元が進められた。

そして、戦闘の余波は兵隊崩れの盗賊を産み、それから身を守る為に民間もゾイドを求め始め、さらにそれにより改造パーツやゾイドの改造を生業とする者も現れ始めた。

今や、人間の生活はゾイドを中心として回っているのだ。

……新地球歴。

その、いつの事で、どの場所かは定かではないが、ある所に相棒ゾイドと共に流浪の旅を続ける一人の男が居た。

過去に背を向け、蓋をして。

気の向くままに、賞金稼ぎで日銭を稼ぎ。

目的は特に無かった。

全能の力を持った古代秘宝も探していないし、地球再生の為に装置を起動しようともしていない。

ある意味では、いい加減な男である。

それは、そんないい加減な男と、その彼が出会ったゾイドと、それと共にある人々の物語である。

1. 「流浪の騎士竜」

……ガキインツ!

その一撃は、相手のゾイドを吹き飛ばした。

その、どちらもが「ラプトル」と呼ばれる、恐竜ヴェロキラプトルの特徴を持ったゾイド。

性能は、両者共々大差はないはずである。

しかし、その場にいる全ての人々からしても、一方のラプトルの繰り出した一撃は、相手のラプトルのそれよりも鋭く、また明確な「殺意」があった。

「がふあっ!？」

吹き飛ばされたラプトルのコックピットから、一人の男が投げ出される。

男は中年でありながらも、筋骨隆々とした巖のような身体をしている。

鍛えられた、強い男といった印象だ。

「……勝負ありですね、父上」

さて、吹き飛ばした方のラプトルのコックピットから顔を出したのは……若い青年だった。

薄暗い、室内にあるゾイド用の闘技場の中で、青年の髪は僅かな光を反射して、銀に光って見える。

だが、青年は銀髪という訳ではない。

これは白髪だ。

「ふ、ふざけるなッ! 誰が貴様のような出来損ないのドラ息子なんぞに……!」

敗北を認めたくなかったのか、男は自身をラプトルのコックピットから見下ろす青年に対して、罵声を浴びせた。

が、男は嫌でも敗北を認めなければならぬ事になる。

……グルルッ

闘技場の暗がりから、唸り声が聞こえてくる。

ズシン、と足音を立てて現れたのは、巨大な影。

大きさは、ラプトルの倍ほどある。

装甲は銀色で、まるで騎士を思わせる。

各部にラプトルと共通する部分が多いが、よく見ていけば別種である事が解る。

「……………リッターは、俺を認めてくれたようですが？」

「ぐう……………ッ！」

男は苦渋の表情を浮かべ、項垂れる。

そして青年は、自らの髪と同じ銀の装甲を持ったゾイドを連れてその場を去ろうとした。

「……………おや？」

外へ繋がる扉の前に、少女が立っているのが見えた。

出迎え、とは考えられなかった。

「自分が乗るハズだったゾイドが奪われて悔しいのか？」

皮肉るような青年の一言にさえ、彼女は答えない。

ただ、悲しそうな顔を浮かべながらうつ向いているだけだ。

「……………わかった」

なら、何も言うまい。

青年は銀色のゾイドに飛び乗る。

瞬間、コックピットが形成され、青年を包み込んだ。

「行くぞリッターッ！」

ギャオオオオツツ!!

青年に答えるように銀色のゾイドは咆哮すると、そのまま走り去ってゆく。

周りから「反逆者を捕らえろ!」「リッターが奪われた!」という声が響いたが、少女はもはや、何も聞いてはいなかった……………。

……………

「……………ん？」

目が覚めた。

ゾイドのコックピットの中は、お世辞にも寝心地が良いとは言えない。

しかし、夜の寒さから身を守る為には致し方がない。

「今、何時だ？」

計器を弄ると、時間が表示される。

今の時刻は、朝の6時。

見れば、地平線の向こうから太陽がひよっこり顔を出しているのが見えた。

「……………まあ、そろそろ行くかな」

目的地の町まで、距離は近い。

それに、日中の内に到着できそうな距離だ。

「起きろリッター、出発だぞ」

グルルルツ

「相棒」を起こすと、青年は目的地の町へ向けて進ませる。

デイノニクスの特徴を持った「相棒」の足なら、予定通りの到着も出来そうだ。

……………

そこは、広野の真ん中にある町。

名を「セーブゲキ」と言い、立地の都合上交通は不便だが、それでも栄えている華やかな町である。

……………もつとも、平和とは程遠いが。

「オラアツ！もつと酒持ってこんかア!!」

今日もまた、昼間から酒場で暴れている、ガラの悪そうな一団が。

残念ながら、警察は来ない。

何故なら、この町を支配しているのはこいつらだからだ。

「お客様、当店のお酒はもうありま……………」

「あア〜ン？うっせえんだよ！」
バキイツ！

顔に刺青のある男が、酒場の店長を殴り飛ばす。
倒れた店長を見下ろし、刺青の男は部下の輩達と共にガハハと笑う。

「町のキングであるフランク様に逆らおうなんざ、一億年早えんだよ！」

「ウツス！パネツス！フランクのアニキイ!!」

男の名は「フランク」。

この町を支配下に置くギャング集団「フランクファミリー」のボス。
今日も手下を従えて、酒場ではか騒ぎを起こしている。

「いたた……………」

「父さん！大丈夫?!」

「あ、ああ、大した怪我じゃないよ……………」

店長に駆け寄るのは、彼の一人娘である「アップル」。

そして若く美しい娘の登場に、テンプレートな悪役であるフランクが何の反応も示さない訳がなく。

「ぐへへっ、よオ〜アップルう！俺様のオンナになる決心はついたかア〜?」

「だっ、誰がアナタになんかつ！」

「遠慮すんなよオ〜！」

馴れ馴れしく、アップルを抱き寄せるフランク。

当然ながらアップルは嫌がるが、そんな事を聞き入れるフランクではない。

「金も女も思いのまま！強いヤツが全てを支配するツ！これが自然の摂理ってヤツだ!!どうだア？ワールドだろオ〜?!」

「ウツス！パネツス！フランクのアニキイ!!」

逆らう者がいない町で、フランクはまさしく皇帝。

自分が右と言えば左でも右になる。

そんな状況に、笑いが収まらなかった。

今日もまた、自分勝手好き勝手に楽しむのだ。

と、舎弟達の「フランクのアニキ!!」の声援を受けつつ、アップルを抱き寄せて楽しんでいた、その時。

「すんませエ〜ん」

ハイな気分になっていたフランク達に水を差すように、気の抜けた声が飛んで来た。

「あアン?!」

「いやだからあ、注文聞いて欲しいんですけど」

何者だと振り向くフランク。

そこには、いつの間に入店したのか、酒場のカウンターに座る一人の男の姿。

フランクと比較すると流石に小さいが、背丈はほぼ平均的な青年のそれ。

マゼンタのロングコートに、ゴーグルの巻かれたこれまたマゼンタの帽子。

合間から見える髪は銀色………と思いきや、よく見れば白い。

肌も不健康な色白であり、ちらちら見える赤い瞳と相まって、アルビノなのか?とも思わせる。

「なんだテメエーこの俺様がフランクファミリーのボス、フランク様と知つての態度かあアン?!」

「「ウッスー!パネッスー!フランクのアニキ!!」」
フランク。

その名前が出た途端、帽子の男の目がピクリと動いた。

「フランクねえ………丁度いいや」

先程まで知らぬぷりだった男は、ゆっくりと立ち上がり、フランク達の方に顔を向ける。

「えつと………まあ、まずは自己紹介といこうや」

クイツ、と帽子の鍰を指で上げる。

人の良さそうな顔をしていたが、同時に取って食いそうな攻撃的な一面も垣間見える。

そんな顔だ。

ちなみに、そこそこ美形である。

「俺はガレットト……まあ、賞金稼ぎ、つて言ったら分かりやすいか？」

「な………ッ！」

フランクにも、悪党としての自覚はある。

帝国と共和国から見れば、フランクも犯罪者の一人であり、賞金がかけられている。

その「ガレット」を名乗った賞金稼ぎが、フランクに何を求めているかは、明白である。

「つーわけで、俺の晩飯の為に捕まってくれと嬉しいんだが、いいか？」

「ナメてんじゃねえぞ!!」

ガレットの、あからさまに煽る態度についてフランクがキレた。

アップルを放り出すと、その場にあつた椅子を掴み、ガレットに向けて投げつけた！

「うわっ!?!」

ガシャーン!と、椅子はガレットの真後ろにあつた机を破壊する。そして。

「来なア!!ナツクルコング!!」

パチンツ、と、フランクが指を鳴らした。すると。

ずどおっ!!

酒場の壁を破壊して現れたのは、ゴリラの特徴を持つゾイド「ナツクルコング」。

かなりのパワーを持つゾイドであり、フランクがこの町で偉そうな態度を取れる理由の一つ。

「ああっ！お店がア………!」

店を破壊され、落胆する店長。

それを見たガレットは、その場から走り去った。

店に被害を出さない為だ。

「テメエ！逃げんじゃねえ!!」

対するフランクはそれが「逃げ」だと解釈し、ナツクルコングのコツ

クピットに乗り込むと、ガレットを追った。

「捕まえろー！なんとしてもブツ殺せ!!」

「ウツスー！パネツスー！フランクのアニキ!!」

怒り心頭のフランクとナツクルコング、そして舎弟達がガレットを追う。

人間とゾイドが追いかけてこをした場合、どちらが勝つかは明白。ガレットは徐々に、ナツクルコングに追い詰められてゆく。

「……………この辺りなら、いいだろう」

が、ガレットの目的は逃げる事ではない。

一つは、酒場に被害を出さないように離れる事。

もう一つは……………「相棒」を呼んでも被害が最小限に収まる大通りに出る事。

「ナツクルコングだ!」

「ひいひい!!」

ガレットを追って大通りに現れたナツクルコング。

その姿を前に、町の人々は恐怖し、逃げ惑う。

当然だ、この町においてナツクルコング……………と言うより、ゾイド自体がフランクファミリーの力の象徴でもあるのだから。

そして、人通りが少なくなったのを確認し、ガレットは相棒を呼んだ。

「来いー！リッターッ!」

ピイイイ……………

ガレットが鳴らしたのは、銀色のホイッスル。

剣のような形状をしているが、犬笛に似た、ゾイドを呼ぶ際に使われる物。

ギヤオオオオッ!!

ゴガガガッ?!

突如、ナツクルコングの前に現れた影に、ナツクルコングは恐れおののく。

「ソニックバード……………いや、ギルラプターか?」

ガレットの前に立つゾイドは、デイノニクスの特徴を持った「ギル

ラプター」によく似ていた。

が、通常のギルラプター……：帝国や共和国で運用されているグリーの機体と違い、ダークブルーとシルバーの装甲に身を包み、一部に「ソニックバード」と呼ばれる近縁種の特徴を持っている。

さらに本来「ウイングシヨウテル」と呼ばれる刃があるべき場所には、代わりに本体を挟むように巨大な剣のような物が生えている。

言うなれば、翼の代わりに手足の生えたソニックバードと言った所か。

帝国で開発が進んでいるらしい、尖った形状の新型キャップが各部に付いているが、ZOバイザーはついていない。

……：が、深紅に染まった目が、そのゾイドが帝国の生まれである事を物語っている。

「ギルリッターだ、イカスだろ？」

ガレットは得意気に笑いながら、その「ギルリッター」と呼んだゾイドの首に飛び乗った。

即座にコックピットが形成され、ガレットを包む。

さあ、戦いの準備は整った。

「始めようぜ、ゴリラさんよ」

「ハンツ！カツコつけだけは一人前だな!!」

フランクからして、ギルリッターは未知のゾイドだ。

近いタイプであるギルラプターとは何度か戦ったが、見た所ギルリッターは、系譜こそ近いが別種のゾイドのようだ。

だが、フランクには勝算があった。

今までも、「これ」で勝ってきたのだから、今回も勝てると考えていた。

「へへへ……：テメエもブチ殺してやるよオ!!」

フランクが懐から取り出した、黒いナイフのような物体。

フランクはそれを、ナックルコングのコックピットに備え付けられた鍵穴状のパーツに向け、一気に差し込んだ。

「強制解放ッ！行くぞオラアア!!」

ゴガアアアアア!!!

元々、ガレットも期待していなかった。

そもそも、フランクの第一印象からして、ろくでもない奴だという事は解っていたから。

「オラァアアツ!!胸熱拳ンンンツツ!!」

赤熱化した拳を振り上げ、ナツクルコングが迫る。

胸熱拳。

その拳は、ガノンタスの装甲をも貫通する破壊の一撃。

……だが、それは一流のライダーが乗っている場合に限られる。

ゾイドを単なる目下の相手への威圧や暴力の為の道具としてしか見ていなかったフランクが、そうであるはずもなく。

「……………飛ぶぞー!ギルリッター!」

ギヤオツ!!

胸熱拳が振り下ろされた瞬間、ギルリッターはその脚をバネのように飛ばし、飛翔。

ズドオ!と音を立て、胸熱拳は地面に食い込み、ナツクルコングの動きを止める。

「な、なんだツ?!抜けねえ!!」

食い込んだ腕を引き抜こうとするナツクルコングだが、上手くいかない。

その背には、上空に舞い上がったギルリッターの姿。

「これで決めるツ!!」

ギヤオツ!!

動けないナツクルコング目掛けて、自由落下してくるギルリッター。

その脚の鉤爪が。

ギルリッターの属するユタラプトル種や、近縁種であるギルラプターの属するディノニクス種の代表的な武器である、脚力と切れ味から繰り出される鉤爪の一撃が、ナツクルコングの背中に突き刺さった!

ど、す、う、っ、!

叩き込まれた一撃は、ナツクルコングの背中にある放熱フィンに深々と突き刺さり、機能を破壊した。

これは、胸熱拳の際に発生する余熱を放出し、ナツクルコングの中樞を熱から守る為の物だ。

これが破壊されたという事は、ナツクルコングは余熱を放出できず、内部に熱が貯まってゆく事になる。

ゴ…………ガガア…………ツ！

運良く、ナツクルコングは兵器ゾイドでは無かった。

ライダーの指示よりも、自身の生命を守る本能が勝ち、強制的にブラスト状態が解除される。

しかしナツクルコングの受けた負荷は凄まじく、目から光は消え、崩れ落ちるかのようにその場に倒れた。

いわゆる、強制停止というヤツだ。

「ちいっ…このポンコツめ!!」

「あ、コラッ！」

フランクは悪態をつくど、ナツクルコングを捨てて逃げ出してしまった。

追いかけてようとするガレットだったが、ギルリッターが鉤爪を引き抜いた時には、既にフランクの姿は無かった。

「ちっ！逃がしたか……………」

やはり悪党だけあって、逃げ足の速さだけは一級品。

宿泊代を賞金首で稼ぐハズが、当てが外れる事になった。
だが。

「や……………やった……………!」

「フランクの奴を……………倒してくれた……………!」

セーブゲキの人々は、ナツクルコングを仕留めたギルリッターを前に、希望の笑みを取り戻していた。

ナツクルコングは、いわばフランクの力、この町を支配する暴力の象徴でもある。

フランクは逃げてしまったものの、ナツクルコングが倒されたとい

うだけでも、セーブゲキの人々からすれば大快挙である。

「やったああああ!!」

「勝った!勝ったぞおおお!!」

やがて喚声が広がり、ギルリッターとガレットを称える声へと変わっていった。

結果的には賞金首Ⅱフランクを取り逃がしたワケだが、こう周りから称賛されれば、ガレットも。

「……………まあ、悪くはない、カナ?」

と、笑顔を溢すのであった。

3. 「旅立ち」

喚声に包まれるセーブゲキの町。

人々の称賛を浴びるガレットだったが、ギルリッターのコックピットから降りようと身を乗り出した瞬間、ある事に気付いた。

「皆聞いてくれ！」

そして、自分とギルリッターを取り囲む人々に向け、呼び掛ける。

「ナツクルコングの様子がおかしい！明らかに生命力が下がっているように見える！」

ナツクルコングだ。

放熱フィンを破壊されたというのもあるが、ガレットの目から見れば、異常に生命力が低下しているようにも見えた。

まるで、ブラスト状態以上の「何か」を負荷としてかけられたかのように。

「この中にゾイドに詳しい人がいたら手を貸してくれ！見ただけの予想だが……このままじゃナツクルコングは死ぬ！」

ガレットも、ゾイドを愛する人間の一人。

故に、ナツクルコングを死なせまいと考えての行動であった。

「えっ……」

「どうする……？」

しかし、いくらセーブゲキの町を救ったガレットの呼び掛けでも、これに素直に答える者はいなかった。

ナツクルコングは、フランクの暴力と支配の象徴として、人々に認知されていたからだ。

そのフランクから見捨てられ、いくらライダーとゾイドは別だとしても、素直にナツクルコングを助けようとする者は居なかった。

「でも、あのナツクルコングだぜ？」

「治したとしても、また暴れるかも……」

予想はしていたが、やっぱりか。

と、ガレットが諦めかけた、その時。

「……わっ、私でよければ！」

怪訝にぎわめく人々の中で、ある少女の声が名乗りをあげた。

私は、ナツクルコングを助ける事に賛同すると。

色々な意味での注目の眼差しを浴びながら、ガレットの元に歩いてくる一人の少女。

14歳ほどだろうか。

背は小さく、黒髪の三つ編みにメガネ、オーバーオールと、田舎的というか、垢抜けない田舎娘といった印象を与える。

「……………君は？」

ガレットの問いに対し、少女は緊張気味になりつつも、凜とした声で答えた。

「わ、私ミルクって言います！ゾイド整備工場をやって……………やってきました！設備と道具なら、ありますっ！」

……………

敗走したフランクは、舎弟共々自分達のアジトである町外れの廃屋に逃げ込んでいた。

荒野のど真ん中にポツンとあるという、今までこんな分かりやすいアジトに乗り込んでくる者がいなかったのは、ひとえにフランクの与える恐怖による物が大きい。

だが、それも今日までだろう。

何故ならフランクは、大衆の眼前で流れ者のゾイドハンターに大敗を喫するという醜態を晒してしまったからだ。

「クソが！クソがクソがクソが！あの忌々しい賞金稼ぎめ!!」

「「ウッス！パネッス！フランクのアニキイ!!」」

「それはイヤミがごるああ!!」

アジトに逃げ帰ったフランクは、荒れに荒れていた。

その胸中にあるのは、につつき賞金稼ぎⅡガレットと、その相棒たるギルリッターへの怒り。

自分に大恥をかかせた相手に、フランクはどうしても復讐したかった。
保有戦力の中では最強であるナツクルコングは手元からは失われた。

が、フランクにはまだ「力」が残されていた。
裏のルートで手に入れた「力」が。

「俺様をナメた事……後悔させてやるぜ！賞金稼ぎいいいい！！」
ギチギチ……………

ふしゆるる……………

廃屋の中で、フランクファミリーの誇るゾイド軍団が、出撃の時を待ちわびていた……………。

……………

やがて、セーブゲキの町に夜が来た。

人々が寝静まり、明日の復興に向けて力を蓄えている間も、その「元」ゾイド整備工場には、明かりが点っていた。

「悪いね、色々手伝ってもらっただけじゃくて、宿や飯まで貰っちゃって」

「い、いえ、私もゾイドは好きですから……………」

そこでは、仰向けになったナツクルコングを前に、ガレットとミルクが修理と整備を行っていた。

ナツクルコングが類人猿に近い姿である事も相まって、まるで人間の手術のようにも見える。

「……………それにしても」

そんな整備の傍ら、ガレットはミルクに注目していた。
若いながらも、プロのような腕前。

おそらく、相当の場数を踏んでいる物だろう。
そして。

「……………ミルク、か」
大きかった。

お風呂上がりで、オーバーオールを脱いだシャツからでも解るぐらい、彼女の胸は年齢と比較するとかなり大きかった。

化粧さえ整えれば、グラビアのトップは飾れそうだ。

それでいて「ミルク」なんて名前なのだから、それも意味深というか「名は体を表す」ということわざが頭に浮かんでしまう。

「……………ど、どうかしました?」

「いや、何も」

とはいえ、ミルクは未成年。

いくら魅力的なバストを持っていたとしても、手を出せばガレットは犯罪者。

それに年齢的にもストライクゾーンからも外れているので、これ以上は注目しない。

それに、今はナツクルコングを助ける事が最優先だ。

「……………よし!取れた!」

日没から、ゆうに4時間。

ようやく、ナツクルコングの大手術は終わりを告げ、ナツクルコングを苦しめていた「腫瘍」は取り除かれた。

これも、ミルクの持つ設備あつての事である。

……………もつとも、このゾイド整備工場自体、経営難でつい最近閉めてしまったのだが。

ゾイドの需要が高騰している時代ではあるが、町にゾイドを持つ者がフランクファミリーぐらいしか居なくなってしまったのでは、しようがない。

後は、ナツクルコングの自然治癒と、生きようとする意思に任せるしかない。

「に、しても……………何だこれ」

問題は、ナツクルコングから取り除かれた「腫瘍」である。

それは、ナツクルコングのコックピットに後付けされた機械から始まり、植物の根のようにナツクルコングのゾイドコア周りに延びてい

た。

金属である事は解るが、こんな物は見た事がない。

「ヤツが耐Bスーツ無しでプラスチック状態を発動したのは、恐らくこいつによる物だろうな……………」

「一体、誰がこんな物を……………」

帝国にも共和国にも、こんな物を開発したという情報も噂もない。そもそも、耐Bスーツが必要不可欠である現行の「マシンプラスチック」や「エヴォブラスト」でさえ、人類の科学を結集してやっとたどり着いた物なのだ。

それを、耐Bスーツも無しに、発動後に走って逃げられるだけの体力を残させるブラスト状態など、あり得ない。

……………「ある都市伝説」という例外があるが、ゾイドと絆など微塵もないフランクにそれが出来るとも思えない。

この「腫瘍」は一体何なのか、二人が頭を抱えていると。

……………ドウツ！

突如、爆発音と共に小さな揺れが走る。

音の方向を見れば、町に火が上がっているのが見える。

「あれは……………!?!」

ガレットの脳裏に、最悪のパターンが浮かぶ。

いや、あのフランクなら、それぐらい仕掛けてくるとも予想できた。

……………

セーブゲキの町は、ふらりと訪れたガレットのお陰で、フランクの暴力と支配から解放……………されてはいなかった。

「うわああー！」

「助けてくれえー！」

夜の静寂を破り、襲来するのはヴェロキラプトル種の小型ゾイド「ラプトル」と、

クワガタムシ種の空飛ぶゾイド「クワワーガ」。

三体のラプトルが、備え付けられた機関砲で町を破壊し、上空のクワールガが空から町を切り裂く。

フランクのゾイドは、ナツクルコングだけではない。

まだ、これだけの戦力を隠し持っていたのだ。

「ひやははは！壊せ！潰せ！奴等に俺様という恐怖を思い出させてやれエツ!!」

「「ウツス！パネツス！フランクのアニキ!!」」

空を飛ぶクワールガから地上の舎弟達を鼓舞しながら、フランクは破壊活動を続ける。

小型とはいえ、ゾイドは十分に驚異。

反撃手段を持たないセーブゲキの町の人々は、逃げるしかできなかった。

「ヒヤハハ！死ねエエ!!」

キシヤアア!!

「うわああー!」

ラプトルが、その鉤爪で人々を切り殺そうとした。

その時。

「あぎやあつ?!」

ギエエツ!?

突如横から飛来した弾丸が、ラプトルを撃破する。

その先には。

ギヤオオオオツ!!

「あれは……………!」

「ギルリッターだ！ギルリッターが来てくれたぞ!!」

咆哮を挙げて、燃え上がる町を救いに現れたのは、ガレットと、背中に備え付けられたA-Zレーザーショットガンを撃ちながら駆けるギルリッター。

町を破壊するフランクファミリーのゾイド軍団を前に、敢然と立ちはだかる。

「ちつ……ここまでやるかフツ……………!」

町の惨状に、ガレットは思わず毒づいた。

人々が寝静まった隙に行われたこの破壊は、奇襲と言ってもよく、逃げ遅れた人々が阿鼻叫喚の地獄を見せている。

……ガレットから見えない所で、きつと死者も出ているだろう。

「出てきやがったな銀ピカあ！ブチブチにブチ殺してやるよオ!!」

だが、フランクからすれば待ちに待った復讐の相手である、ガレットとギルリッターを誘い出す為の陽動に過ぎない。

そして、獲物は陽動に乗ってバカ正直にやってきた。

「今だお前らア！ブツ殺れエ!!」

「ウッス！パネッス！フランクのアニキイ!!」

キシヤアア!!

舎弟達の乗る三体のラプツールが、ギルリッターに襲いかかった。

後方の二機が機関砲を撃ち、前方の一機が鉤爪による近接戦闘を仕掛ける。

集団戦闘の、基本フォーメーションである。

「遅いッ!!」

「あべしっ?!」

しかし、ガレットからすれば何度も見て、経験してきた物。

先頭のラプツールを踏み台にして、一気に後方のラプツール二機への距離を縮める。

「ひいっ！来たア!!」

ギエエツ!?

ライダーもゾイドも、いきなりの事にビビってしまったている。

いつもなら、このまま仕留める事が出来ただろう。

いつもなら。

「ウオラアッ!!」

「ぎっ?!」

突如、ギルリッターの横から走る衝撃。

ラプツールを仕留め損ない、無様に転がるギルリッターの真上を、吹き飛ばした張本人であるフランクのクワァガが悠々と飛んでいる。

「敵は空にも居るって事忘れてねーかア？銀ピカあ！」

「ウッス！パネッス！フランクのアニキイ!!」

クワーガの妨害により、戦いの流れが変わった。
倒れたギルリッターを取り囲み、ラプツール達が集中砲火を浴びせる。

「ヒヤハハ！」

「イキリやがって！死ぬやナイト気取り！」

キシヤアアア!!

三方向から浴びせられる弾丸の雨あられに、ギルリッターは思わず膝をついた。

ギルリッターの装甲は厚い。

けれども、こうして攻撃に晒され続ければ、じり貧である。

「……………こりゃ、厳しいかもな」

ギュルルル……………ッ

いつも飄々としているガレットが、珍しく表情を歪めた。

……………

上がる戦火を、ミルクは遠目から見ていた。

フランクの卑劣な罠に追い詰められる、ギルリッターも。

「このままじゃ……………ッ！」

気がつけば、ミルクは走り出していた。

ミルクとガレットは、たかが数時間の、ナツクルコングの手術に関わっただけの関係だ。

けれども、共にゾイドを愛し、助けようとした相手を、ミルクは放つてはおけなかった。

助けなければ。

その気持ちだけがミルクを突き動かし、彼女をある場所へと導いた。

そこは、ミルクの整備工場のガレージ。

表向きは、周りの住人を怖がらせない為に、空っぽという事になっ

ている。

だが、そこに「それ」はあった。

冬眠状態で保存してあるそれを、ミルクは目覚めさせる。

「パパ……………この子の力、私に貸して！」

それは、元共和国のゾイドライダーである父親が愛用していた、かつての相棒。

眠り続けるはずだった、鉄壁の守り手。

その名は……………。

……………

ギユルルル……………ッ!

ギルリッターが、身を低くした。

数十分続いた機関砲による攻撃で、体力を消耗したのだ。

そして、狡猾なフランクはその隙を見逃さない。

「今だーブチ殺してやるよオ!!」

クワーガの大顎が開き、ギルリッターに迫る。

トドメを刺すつもりだ。

「ヤバ……………ッ！」

油断した。

ガレットが目を見開く。

再び叩き込まれようとするクワーガの一撃に、身構えた。

……………が、その一撃がギルリッターに浴びせられる事は、無かった。

「ひやは……………ぐええっ?!」

ギイイッ?!

ズドオ!

調子に乗ったフランクが、クワーガごと予想外の方向から飛んできた一撃に吹き飛ばされた。

翼を破壊されたクワーガは、そのままフラフラと落下する。

「ふ、フランクのアニキイ!!」

リーダーを失い、狼狽える舎弟達。

「今の一撃は……………」

突然の援護射撃に、驚くガレット。

彼等の視線の先には、こちらに向けてガシャガシャと迫る、一機の小型ゾイドの姿。

「あれは……………ヤドシエルか?!」

そこに現れたのは、背部にコンテナを背負った、ヤドカリがごときゾイド「ヤドシエル」。

コンテナ部にA―Zバルカン砲を装備した、武装カスタムタイプだ。

だが、問題は誰が乗っているか。

が、ガレットの脳裏に浮かんだその問題は、直ぐに解決した。

ヤドシエルから、通信が繋がったのだ。

『無事ですかガレットさん! 私です、ミルクです!』

「ミルクちゃん?! どうして……………」

通信に映ったのは、ヤドシエルのコックピットに座るミルクの姿。

意外な援軍の登場に、ガレットは目を見開く。

「あなたがやられる姿を黙って見てるなんて出来ない! 私だってやるんです! 見てて下さい!」

キシィィイツ!!

初めての戦場に、ミルクは怯えていた。

けれども、彼女の判断は的確だった。

バルカン砲の砲身を上げ、ラプツール達に向けて狙いを定め、トリガーを引く。

ズドン! と弾丸が吐き出され、それは取り残された舎弟達とラプツールに襲いかかった。

「うわわっ! あのヤドカリイ!」

「ヒィィィ!!」

降り注ぐ砲撃は、所謂飽和射撃だった為に、ほとんど当たらない。が、ラプツール達の動きを止め、攻撃を止めさせるには十分に役に

立った。

「……………ナイスアシストだ、ミルクちゃん」

ギヤオツ!!

「俺達も行くぞー!ギルリッター!」

そしてターンは、再びギルリッターに回ってきた。

全身のバーニアを噴射してラプツールに接近し、一撃。

「ぎゃっー!」

ギエツ!

まずは一体、鉤爪で仕留めた。

「二機やられた?!」

「クソツツ!撃て!撃て!」

残る二機のラプツールによる機関砲射撃が放たれるが、もうギルリッターを止める事は出来ない。

放たれた機関砲は次々と避けられ、突っ込んできたギルリッターは、ラプツールに噛みついた。

「ぎえっ?!」

「だりやあつ!」

そしてそのまま、もう一体のラプツールに向けて投げつけた!

ガシャンツツ!とラプツールとラプツールがぶつかり、そのまま二体揃って近くにあった半壊した建物にぶつかる。

二体のラプツールの目から光が消える。

停止したのだ。

「……………よし!」

ギヤオオオオツ!!

再び、ガレットとギルリッターは勝利を得た。

ギルリッターが勝利を喜ぶように、天高くその咆哮を響かせていた。

……………

こうして、セーブゲキの町を襲った危機は収まった。

町を襲ったフランクファミアリーの舎弟三人は逮捕されたが、肝心のフランクはまたも姿を眩ませていた。

町外れにあるアジトも、既にもぬけの殻だったという。

「本当に、行ってしまわれるのですか？」

「すまんね、でも大丈夫、あれだけ叩きのめされたフランクはもう町には戻って来れないよ」

一連の事件が終わった後、ガレットはセーブゲキの町を出る事にした。

セーブゲキの町長は呼び止めたが、ガレットは、もうここに自分が居る必要はないと確信が持っていた。

あれだけ「恥」をかかされたフランクが戻ってくるとは思えないし、自分が居なくともこの町は復興できるだろう。

そして、セーブゲキの町を出るのは、ガレット一人ではない。

「ミルクの事、頼みますよ」

「ああ、任せてくれ」

ガレットの後ろから、ひよこつと顔を出しているミルクもだ。

整備工場を再び経営する為に、ガレットについていつて資金を稼ぐ事にしたのだ。

それに、ガレットからしても、ゾイドの整備や改造に明るい人物が居てくれた方が何かと心強い。

ゴルル……………

「町の平和を守ってくれよ、コング」

助けたナツクルコングはというと、町の保安部隊で面倒を見る事になった。

最初は皆警戒していたが、元来大人しいゾイドである事が知れて、慕われるようになったからだ。

もし、再びフランクのような輩が現れた時には、保安部隊と共に町を守る強力な味方になってくれるだろう。

「それでは、またいずれ！」

ギヤオオオオツ!!

ガレットを乗せたギルリッターと、ミルクを乗せたヤドシエルが、朝焼けの中へと駆けてゆく。

まだ見ぬ世界を求め、彼等は旅立った。

……この時、ガレットもミルクも知らなかった。

これが、とある大事件へと繋がる事に。